

## 社会科教育

明日の社会・明日の教育をつくる  
社会科をめざして

## 前田 輪 音

本分科会は、小・中・高・大・研究会などの所属者および学生計29名の参加者により、16本の報告・検討がなされた。

以下、当日の報告を報告順ではなく素材等に注目していくつかに分け、内容を一部紹介したうえで、研究課題にふれる。

## 一 各レポートの内容

## 1 ものづくり・地域を素材に

二〇一二年、今年も稲は豊作か？―子どもたちに忘れられない体験を― 山川功さん（釧路市立阿寒小学校）、  
「熊石高校の『地域巡検』」 中谷祐貴さん（熊石高校）、「社会科における物教材の効果的活用」 駒井崇さん（東川町立

## 東川第三小学校）

山川報告は、総合的な学習の時間を用いての稲作実践について、数年にわたって継続・報告してきている「今年」版である。ときに泥だらけになる作業であるにもかかわらず、特に女子が意欲的に取り組むことなどについて関心をもたれた。

中谷報告は、1日使ってバスで地元・熊石をまわる取組みで、海洋深層水総合交流施設、門昌庵、八雲町乳牛育成牧場など、歴史・産業満載の地域の実際にふれたものである。

駒井報告は、歴史中心の小学6年社会科に興味をもてるよう導入した「物教材」が紹介され、紙テープ、年表、黒曜石での石器作り、古墳のジオラマ作り、木簡づくり、戦艦三笠のボスターや軍艦マーチのBGMなどがみられた。

中谷報告をはじめとする、高校での地域巡検および山川報告ともにカリキュラムに位置づけるための目的・内容・方法が確立されることがのぞまれる。

三報告ともに、現物をつくる・現物にふれるという重要な一認識形成過程を有しており、豊かに学ぶ子どもたちを育成する契機を有しているといえよう。

## 2 歴史的素材をもとに

「アジア・太平洋戦争開始80年、若い世代に戦争をどう教

えるか」児玉健次さん（高退教）、「新日米安保条約」松林洋さん（上磯高校）

児玉報告では、アジア・太平洋戦争が始まって80年たった今、国連憲章、日本国憲法に立脚しながら、NHK「証言記録 兵士たちの戦争」や「防衛計画の大綱について」（閣議決定）などいくつかの資料を提示し、若い世代にどう伝えたら良いかについて、問題提起がなされた。

松林報告では、新日米安保条約の意味を考えるために、民衆による核戦争阻止の活動や、本土米軍基地・沖縄米軍基地、憲法九条の意義などを柱に、いくつかのDVDを視聴させ、解説するという構成である。

いずれも、子どもに対して、どのような歴史的事実を、どのように提示して考えさせ・捉えさせるのか、改めて考えさせられる報告であった。

### 3 裁判素材をもとに

「授業プログラム改訂の足跡―恵庭事件を素材に―」前田輪音さん（北海道教育大学教職大学院）、「司法権力に抵抗できる裁判員を育てよう―しっかり教えた憲法、冤罪、死刑制度」山本政俊さん（有朋高校）

前田報告は、恵庭事件を素材に地理的歴史的要素も取り入れながら作成した授業プログラムの概要と改訂の足跡を

報告した。4時間構成を3時間にして高校での実践も予定されている。

山本報告は、免田事件をはじめとする冤罪の事例や司法制度改革について解説、あわせて日本弁護士会作成のDVDなどを視聴し、裁判員制度や死刑制度等について生徒の意見を書かせ・交流したものである。

裁判素材をどう授業化するかは今もって大きな課題である。山本報告にあるように裁判員制度が導入された今日、その役目は大きい。いつそうの実践報告の蓄積と検討がのぞまれる。

### 4 労働問題の素材をもとに

「労働者の権利教育PART3―弁護士・社会保険労務士とのコラボ授業―」山本政俊さん（有朋高校）、「就活のバカヤロー」大学生の就職活動を考える」荒閑雅仁さん（銚路工業高校）

山本報告は、勤務校の生徒たち「自身が未来をデザインできるよう支援」する一環として、専門家の解説やDVDを用いて、労働・賃金・貧困・組合などを教えたこと、その結果の生徒たちの声が紹介された。

荒閑報告は、レポート名を書籍（石渡嶺司・大沢仁 光文社新書）からとり、道内および全国の就職の難しさおよび

び大学教育との関係について述べた。

両者ともに高校での実践報告だった。高校生にとつて就職は喫緊の課題であり、このような実践・議論・意見交換は重要である。

## 5 東日本大震災・原発被害を素材に

「東日本大震災・原発をどう教えるのか―現代社会の授業―」山本政俊さん（有朋高等学校）、『「原発は？」室生も考えた」松本敏さん（室蘭工業高校）、「東日本大震災ボランティア報告と被災地からの報告を高校生とともに学ぶ」村上博章さん（大麻高校）、「教科『農業』で取り組む生徒が社会とつながる」学習を指してその2―福島第一原発による農民・農家の窮状を日本国憲法から考える―高野正さん（上士幌高校）、「原発と放射能の授業」をつくる」川原茂雄さん（札幌琴似工業高等学校）

周知のごとく、3・11の東北関東大震災は、未曾有の被害をもたらし、いまだ復興のめどがたない地域も多い。そのなかで、その現状や問題点、今後の見通しや解決策等、多くの実践が試みられてきている。特に社会科学という教科はその使命をよりいっそう帯びていると考えて良いだろう。山本報告は原発被害を伝えエネルギー問題を考える構成に、松本報告は工業高校の専門の違いに着目しアンケート

をとり識者の見解・歌詞などをもとに、村上報告は教師のボランティア体験とそれをもとにした教科通信作成に、高野報告は農民の被害を新聞記事やニュース映像から示しそれを憲法と直結させて考える取組であった。一方、今回の報告は高校生対象の実践が中心だったが、川原報告は市民一般を対象にした「出前授業」の取組であり、二〇一一年五月以来、数多く開催されてきているものである。

震災・原発の被害についての授業はいまや全国的に広がりがつつある。教育実践界のなかでよくあることとして、時が過ぎれば下火になるものも数多い。震災・原発の被害は、これからの社会の在り様を考える重要なメッセージにあふれている。私たちは継続的・発展的な取組を進めていかねばならない。

## 6 表現活動の本質を考える

「憲法について書くことで内面化できるだろうか」米家直子さん（池田高等学校）、「レポート作成とレポート考查による現代社会の学習」木谷弥彦さん（俱知安高校）

木谷報告は、冬休みのレポート課題をA4版1枚にまとめ、それを学年末の定期考查で出題・記載させるといいう取り組みである。生徒たちが自ら考えた課題は多様であり、出来上がりも様々だったが、ふだんのテストの点数がかな

り低い生徒も、自分の住む街の外人の人口を自ら駅前通りに立って調べ・考察するなど、意欲的に取り組む様子が報告された。

米家報告は、憲法についていくつかの「書く」機会―「労働組合の必要性について」や、「民主主義が万能ではないことを示す具体的な例」などについて自分の考えを書く―を設定した実践である。憲法のいわば内面化の在り方についての模索がみられ、「表現する活動」の本質的な課題の一端が見え隠れしていた。

両報告ともに教育における「表現」活動の本質を今一度考える契機を有している。

## 二 実践の継承・発展・深化のために

本年度の本分科会開催当初に設定した課題のうち、次の2点について述べる。

### 1 社会科教育を取り巻く現状と課題

とくに、震災・放射能汚染がなげかけられるいわゆる社会の諸問題に着目した実践報告は多かった。社会科教育の教育内容として、社会の諸問題という素材は教育内容において重要な位置を占める。それをどのように構成し、教材化する

るかは依然として課題である。問題の内実や構造をとらえ、教育内容や構成を組み立てていく使命があるだろう。

また、そのことを通して自然科学・社会科学等の学問が明らかにしたその内容を、教育実践というフィルターを通して、その学問の内容自体に何らかのフィードバックがなされる場合もあろう。この社会をより良くするための大きな課題を担っている教科のひとつは間違いなく社会科教育である。その使命を私たちは忘れずに明日の実践をつくりあげていきたい。それはまた、この社会の未来を構想することにもつながる可能性があるのだから。

### 2 目的・内容・方法の課題

当初、この点に関連して本年度の課題として、「子どもと教育内容をつなげる」「過去・現在・未来をつなぐ授業づくり」「全体構造の模索」の3点をあげた。

今年はいこれらと関連しつつも、素朴な課題を提起したい。本分科会はレポート数も例年多く、参加者の積極的な姿勢に感謝したい。しかしながら、それゆえに研究会当日、検討に十分な時間を割けない事態も生じている。その際、帰宅後、持ち帰ったレポートにあらためて目を通す機会も増えよう。

そのときのために、レポートには、タイトルはもちろん

だが、目的・対象・内容・実践の実際・子どもの反応・実践の意義・課題、などがわかりやすく明記されていることが望まれる。これらはいずれもその実践報告を検討・継承するうえで鍵となる。

小中学校（あるいは大学も）を通した北海道独自の実践の提案もしていきたい。この北海道で実践すること自体、北海道独自と言えるかもしれないが、せっかく多校種があつまる本分科会だからこそできると思われる。長期的に取り組むことを前提に、積極的な提案をお願いしたい。

### 三 来年度に向けて—本分科会の意義の継続のために

一人一人の実践家としての教師が、その実践を自らひもとき、その意義について語り、多くの仲間と検討しあうことは、珠玉のひとつときとなる。

教育実践はもとより、それを表し意味づけるレポート作成は決してたやすいことではない。しかし、これからも、一人一人の参加者がチャレンジすることがのぞまれる。それがまた、すぐれた実践を生み出し、教師の実践する力をアップすることに直結するのだから。

（北海道教育大学 教職大学院）